

# 総務常任委員会記録

日時 令和8年4月10日(金)

場所 第一委員会室

午前 11 時 15分 開 会

○伊藤欣哉委員長 ただいまから総務常任委員会を開会いたします。

本日は全員出席であります。直ちに本日の会議を開きます。

## 1. 政策提言について

○伊藤欣哉委員長 前回の委員会では6月の常任委員会で政策提言のテーマを決定するというスケジュールを確認をいたしました。今回の委員会で提言テーマの候補をいくつか決めたいと考えております。また可能であれば、候補のテーマに沿った関係者とのヒアリングについても決めさせていただきたいと考えておりますが、よろしいでしょうか。

(異議なし)

○伊藤欣哉委員長 ご異議なしと受け取りました。

前回の振り返りということで、若干申し上げます。議論に入る前に前回の委員会について繰り返しますが、前回の委員会で事務局から提案させていただきました資料、さらにその資料に基づいて、さらにAIを駆使しながら、中身を分析し、資料提示をさせていただくこととあわせて、本市の進む方向ということで、当局がこれから進めようと考えていることなど、いろいろな意見を幅広く拝聴してそれも含めて提言テーマを決めていく方向性ということで確認をさせていただいております。

既に事務局よりチャットツールにおいてお送りさせていただいておりますが、AIによる分析をした内容についてご説明をしたいと思います。スマートディスカッションに先日送付したものと同じものを掲載しておりますのでご確認をください。他につきましては事務局より説明をさせます。

事務局。

○事務局 それでは事務局の方から先日チャットツールでお送りいたしました一般質問と市民アンケート分析のレポートについて改めてご説明させていただきたいと思っております。

初めに、本資料は過去5年分の一般質問のデータと酒田市総合計画に係る市民アンケートを基に分析したものになっております。

一般質問の変遷というところで、今まで過去5年に一般質問の分野ごとの集計をお出ししております。令和6年に関しましては大雨災害の関係で、質問が急増している点にご留意いただきたいと思っております。

3、市民意識の構造分析について、でございます。市民アンケートを分析した結果三つの大きな課題を浮き彫りになったものを示しております。第一に感情と満足度のギャップということになります。酒田市に対して好きと回答した方が9割を超える一方、住みやすいと考えている市民の方が76.6%ということで、そこに14ポイントの差があるということで、その感情としては好きであるけれども生活の満足度というところまではそこに至っていないという、そういったギャップが見られたということです。続いてデジタル活用のギャップについてです。ス

スマートフォン保有率と市民の市政参画の現状ということで、スマートフォンの保有率は約9割という。そのハード面に関してはだいぶ普及しているという現状がございますが、それに対して市民の参画の機会が少ないという感じる層が6割を超えており、市民が参加できる仕組み、ソフトの部分が不足しているという現状が見て取れました。第3に防災意識を自分事として考える割合というところでございます。こちらについては令和6年の議会の方では大雨災害に関連する議論がたくさん行われましたけども、そこに対するその市民の具体的な対策の実施率に関しては、5割というところでとどまっていたようでございました。

そこから議会での一般質問と市民のニーズのクロス分析をするということで、そこで4つの領域の方から、そこにニーズとのギャップがあるのではないかなというように示させていただいております。一つは防災関連ということで、これまでインフラ整備の議論はたくさん行われていたんですけども、そこに加えて今度市民の行動変容を促すような、そういった議論をしていくってところが、そこに議論の余地があるのではないかなというところが出ておりました。続いてデジタル技術関連につきましては、行政効率化の推進の議論は多く出されましたけれども、市民がスマートフォンを通じて市政に参加するというふうなところに関しては、議論も相対して少なかったということなので、ここが一つのニーズになるのではないかなというようになっております。続いては世代間利益の不均衡というところで、ここに関しては具体的には総務常任委員会の所管というよりは、全体的なお話になりますが、重要課題である子育て支援の議論、こちらについてはたくさんされておりましたけども、市民の割合でいうと、やはり子育て世帯というのがその全体の2割3割といったところに対して、それ以外の非子育て世帯も含めたところの住みやすさに波及するためにはどうしたらいいのかというところの課題でございます。4つ目が東北公益文科大学の活用の件でございます。アンケートの結果を言いますと、東北公益文科大学を利用していないと回答した市民の方々が9割に近い数字が出ておりました公立化に関する議論というのは今までもたくさんされてきましたけれども、市民アンケートから見える大学に対する、その心理的距離というか、そういったところが出ているのではないかなという分析結果が出ておりました。

以上を踏まえまして、提言テーマの例ということで3つ挙げさせていただいております。一つが市民の市政参画につながるプラットフォームの構築というところでございます。こちらがスマートフォンを含めデジタル化というところを、単なる事務手続きのデジタル化だけでなくスマートフォンを通じて市民が日常的に一緒に参加できるような参画型プラットフォームを構築してはどうかというふうなご提案でございます。そこで蓄積されたデータを分野横断的に利用することで、市民のニーズに合わせたより効率的な行政運営の一助になるのではないかなという、そういった提案がございました。

続いて市民の行動変容を軸とした防災政策ということですが、近年の気候変動、様々ございますが、そういったところに対して構造物だけで全てを防ぐというのはなかなか難しいのではないかなというところから市民に対して、備蓄実施率の向上といったそういったソフト面から防災を進めていくことによって、対策ができるのではないかなというところが出ておりました。

最後に東北公益文科大学を多世代交流施設へといったところで、大学を若者だけでなく、様々な方々が集まるような施設へ転換していくことで、様々なつながり、社会関係資本といいますか、そういったものを向上させる拠点とすることで、様々なメリットといいますか、地域全体のシビックプライドの底上げとか、新しい公共のあり方が見えるのではないかなというふうな

そういった提案の例がございました。資料の説明としては以上になります。

○伊藤欣哉委員長 これはあくまで議会一般質問と市民アンケート、これをA Iでクロス分析をした効果、いわば市民の意識を含めながら、テーマ設定をしましょうというふうな一つの手法としてまず、3つほど例示をしていただいたところがございますが、これにこだわったところではないんですけれども、テーマどのようなものにしていくかと、これも含めて皆さんからご意見をお願いしたいと思うんですけれどもいかがでしょうか。

佐藤千佳夫委員。

○佐藤千佳夫委員 的外れになるかもしれないんですが、防災対策がすごい大事だと思うんですね。ただ、一般市民としてすごく謎なのは、例えば、この前みたいな地震あったとき、すぐ避難しなさいって言って、もう今すぐ逃げなさいって言われた場合と、地区の自治会のマニュアルでは班長は一軒一軒の家をちゃんと確認しなさいとか、何かそういうのでいろいろ前提がバラバラなものの防災対策が今、混ざってるような気がするんですね。ですのでどういふときにはどうなのかっていうところもやっぱり整理しないと、いつまでたってもこれは変わらないような気がするんです。

ちょっと意見なんです、自分だけ悩んでるのか。自助・共助といった場合、どんなときの共助が必要なのか、自助が優先なのかっていうようなことを、またみんなに伝わってない。あさって、自治会の方も、あしたかな、あるんだけどそこら辺でもみんな悩んでるのはいると思うんですよね。組織はあるんですよ。炊き出しは誰がするか、何々は誰がするか、とあってあるんだけど、それ以前の問題の前提が整理、もっと整理して市民に伝わるようなものがあっていいのかなってちょっと常々思ってたところです。

○伊藤欣哉委員長 2つ目の行動変容をテーマとした場合の落としどころが非常に難しいのではないかとこのふうなご意見と承りました。

他にございませんか。

ちょっと意見が出ないので指名します。大壁洋平委員。

○大壁洋平委員 東北公益文科大学とかの案は出てますけど、どこまで今公立化になって、どこまで我々がそう言えるのかっていうところもあるのかなというふうに思ったので、この辺はちょっと難しいのかなと思いますし、市民が大学を利用するっていうのも、どういふふうに利用するんだらうかっていうところもちょっとここは想像つかなかったんです。

私がやりたいとしたら、私得意なデジタルのところなんでその辺は少し興味はあるなと思います。やっぱりその、行政改革のDXはやってるんですけども、市民に対してはDX、デジタルの普及はちょっとまだまだ酒田市遅れてるなっていうところで、南陽市の方はChatGPTとか生成AIの使い方の説明をですね、行政でやってたりとか、市民に向けてやってるとかってありましたので、それを結構全国的にニュースになってたりしたので、そういったところも酒田市も行政だけじゃなくて一般市民も使えば便利なんだなっていうところをわかっていただければいいのかなというふうに思いますので私として意見はDXの方がいいのかなというふうに思います。以上です。

○伊藤欣哉委員長 今、酒田市でさかposを展開して、ある意味意思疎通のツールとして開発しようとしてるんですけどももっとさらに先進的なところをこれ目指してるのかなっていうような印象もあるんですけどもこれは技術的な問題だと思いますか。

大壁洋平委員。

○大壁洋平委員 技術的な問題というより、多分使い方が多分まだ皆さんわかってないなっていうところが一番あると思います。私はわかっているんですけど、この間、市原栄子議員とかには、もうChatGPTを教えたらもう今回一般質問でも、代表質疑も大体ChatGPT使いながらやったので、やっぱそういったところ、私は市民向けにやっぱこう行政のシステムどうのこうのだけじゃないけど、その辺の使い道とか、どういったものなのかっていうと、もう議会もそうですし、ちょっと勉強をしていく必要があるのかなというふうに思いました。

○伊藤欣哉委員長 遠田敏子副委員長。

○遠田敏子副委員長 今、大壁洋平委員から出ましたとおり、DXを市民の皆様、私も含めてですけど、市民の皆様が使いこなせてないっていうところでは、本当に私の地域にも、このさか波斯、酒田市のホームページを携帯で見れるようなそういう仕組みも知らず、そしてこの操作の仕方もわからないっていう方がいらっしやって、私の携帯を見ながら一緒に設定をし、大変喜ばれて今ではもう使いこなしてる。これは70代のご婦人なんですけれども。今の東北公益文科大学の学生さんのサークルですか、ゼロというサークルがあって、そのサークルの皆さんが商業施設の入口だったり、そういうところにスペースを設けて、携帯、スマートフォンの使い方を教えますよっていうこういう活動をしているグループもあります。サークルがあるので、そういった方々からもご協力をいただきながら、市民の皆様が自分の持ってる携帯をフルに使えるように、DXをもっと進めていく、そして市とつながるように仕向けるではないんですけど、そうやってご協力をいただけるような活動も一つありかな、なんて思っています。以上です。

○伊藤欣哉委員長 同じような意見でプラットフォームの構築よりも先にデジタルツールを理解していただいて、活用できるようにしないと。

大壁洋平委員。

○大壁洋平委員 あの続けてなんですけど、さっき防災の話出ましたけど、いやマニュアルとしてちゃんと多分あって、だからそういったことをいちいちやっぱマニュアル見返すっていうのが大変で、今の若い人たちって、説明書見ずに機械とかを写真撮ってそれで説明をしてくれるんですよ。ちゃんとAIが。なのでマニュアルも全部読み込ませてこういったときはどういうふうに状況をすればいいっていうのを、マニュアルからこう抽出してそれでできるのでそういったことも全部こういったことも今、佐藤千佳夫委員がおっしゃったことも網羅できるので、やっぱりそういったところの意識改革なり仕組みづくりなどをしていった方がいいのかなというふうに思いました。

○伊藤欣哉委員長 田中廣委員。

○田中廣委員 庁舎内のDXは確かに進んでると言ってますけれども、実は、ある部長さんから言われたんですけども下まで伝わってないと、使いこなせてないと、というのが現状なんだそうです。あれだけ毎年何億お金をかけていながら、実際それを、DXを利用して業務に生かすっていう部分がまだまだできてない。そこをなっていないのに、市民をどう巻き込む、そのところをどうやってあれするのかっていうのが、やっぱり一番課題として残ってくるところじゃないのかなというふうにして、私は思ってたんです。プラットフォームを作る、それはそれでいいんだろうと思うんですけども。でも実際どういう世界を酒田市として、この総務常任委員会として、描いていくのかっていう部分も含めて、できればそういう話し合いができればいいかなというふうにして思います。

○伊藤欣哉委員長 佐藤千佳夫委員。

○佐藤千佳夫委員 今おっしゃられたように、酒田市としては、要するにDXすることで何が便利になるのか、庁舎の中ではまだまだ課題いっぱいあると思ってます。もう本当に半年前、エレベーター乗ったら、そんなデジタル関係の人、「DXなんて面倒くさいだけだ」みたいな感じで話してると思わず耳傾けてしまったんですが。でも、市民もやっぱり使っていないといけないんだと思うんですよね。

例えば何をすればいいか。今回の物価高騰のやつで、一体どんなものものを市民が望んでいるのか、というのは、もう今のさかパスでちょっと押せば、市民の意見はみんなで一気こう入ってくるわけです。そうするとスピード感が生まれる。つまり、市民サービスに対してのそのスピード感が生まれるというすごいメリットがあるんだよとか、困った感をもっともっとこう伝わってくる伝えられるんだよ、とかっていうそのためにDX使って、あるいはこんなことできるんだよっていうことをやっぱりアピールしていくっていうのはすごい大事なのかなと思ったところでした。

○伊藤欣哉委員長 この便利さを理解していただくと、啓蒙していくといいますか、話し合いを深めながら、多くの市民の方々から理解をしていただいて使おうというふうなムードを作り上げていく、ということのテーマとして設けて進めるというふうなところでしょうか。

杉山道弘委員。

○杉山道弘委員 いろいろお話聞いてまして、まずあの防災の、2番目の防災の件ですけども、意思疎通が図られてないと思うんです。これ、地域によってもかなり違うと思うんですけど、ただコミセン単位でいろいろ講習とかやってるとこもあれば、やってないところもあるんで、そこら辺も大きな原因だと思うんですけど、そういうのもDX化とかそういう勉強することによって統一されるのかと思っております。

個人的にはですね、大学の多世代交流施設ってのがすごく気になって面白いかなと思うんですけどよくよく考えますと、ちょっとできたばかりで、これやるのはもう1年2年先の方がですね、大学の状態を見てやった方が面白いのかなと思ってるところです。今やるのは、皆さんおっしゃるようになりますね、一番上のプラットフォームの構築というか、私は賛成します。以上です。

○伊藤欣哉委員長 今第一案として、DXを普及させていこうというところもあわせて、市民が参加できるような、利便性の高いプラットフォームの構築ということがテーマとしてどうかということが出ておりますが、一つに絞るのはまだ時期尚早なわけで、もうひとつぐらいですね、皆さんからご意見を賜りたいと思いますが…。

大壁洋平委員。

○大壁洋平委員 やるとすれば、今回見ると教育関係やっぱりちょっと少ないなっていうふうに思っています。正直言って、全国的に見て酒田市の学校のその勉強の偏差値っていうか、偏差値が、数値があんまり正直よろしくないっていうふうにありますので、そういったところもなかなか質問しづらいっていうか意見しづらいところもあるんですけども、やっぱりその辺もしていけないといけないかなっていうふうに思います。これは個人的な意見です。

○伊藤欣哉委員長 佐藤千佳夫委員。

○佐藤千佳夫委員 今の偏差値というところ、やっぱりすごくずっと高度経済期、成長しているときはそういう大事されてきてそれで偏差値によって、その人の能力が決まるみたいな状態が

あるんですが、今の学習指導要領は、戦後の学習指導要領と大きく転換して教える教育から教えない教育っていうところに動いています。つまり、自分が課題に直面したときに、それに自分で考えて判断して行動できる人、これだけをこれをまず一番最初に育てていこうっていう感じになってます。だから何も勉強できても、それができなかつたら駄目だよ、というようなものに動いてるんだけど、どうしても地方はまだ偏差値っていうのはとられ過ぎてるっていうところもあるので。もちろん何も無いところでは駄目なわけだけでも、本当にそういう生きていく力を育てる教育っていうのが、今生き抜く力って変わってますが、生き抜く力を育てる教育っていうのを、本当に酒田市としてもつけていくっていうのはすごいいいことかも知れません。

東北公益文科大学の使い方はイメージとしては酒田市総合文化センターの分所みたいな、支所みたいなイメージなのかなとちょっと思ってたんだけど、酒田市の部分が一部あるので。だからすぐ何かしてとかっていうことは、私も今のところはないです。

○伊藤欣哉委員長 確かに教育の方針としての今、佐藤千佳夫委員が言ったように課題を見つけること、それを解決をすることでグループで組んで議論し合って探求していくというふうな授業スタイルに変わりつつ、四中はそういうふうに変ってきております。

確かに偏差値、秋田県があれだけ良くて酒田市はなんでだと言うっていうようなことはやっぱりあるかと思います。その辺含めたところのちょっと議論が必要かなというふうに私は思いますね。

佐藤千佳夫委員。

○佐藤千佳夫委員 ちなみに偏差値上がってる地域っていうのは、もう1月で全部勉強はして、2月3月4月はそれだけに特化して偏差値を上げるためのそういう取組をしているのは、今何件か現在あります。そういうのでそんなことしても、全然賢くはならないんだろうなと思いましたので、ちょっとあの情報だけです。

○伊藤欣哉委員長 他にありませんか。

遠田敏子副委員長。

○遠田敏子副委員長 市民意識の構造分析というところで、酒田市を好きだと言ってる方が90%を超える一方で、住みやすいかと聞かれたときに、14ポイントの開きがあると言って、これは感情と利便性のギャップがあるんじゃないかということなので、やっぱり好きなんだけれども、この暮らしやすい方向へ向かっていくために何をしていかなきゃならないのかって考えると、やはり交通の便であったり、買い物のしやすさだったり、そういうところをもっと前に進めていかなきゃならないんじゃないかなって。そうすることで好きと言った人が住みやすいに変わっていく、イコールになっていくんじゃないかなって思うんですけど、どうでしょうか。

○伊藤欣哉委員長 一昨年ですか、公共交通部分を政策提言として提言をしてるんだけど、そこについては、進捗状況を確認をするということも常任委員会の中ではひとつの作業になるかなと。今回は過去のものに重複しないような、まずテーマ決めをしていただかないといけないかなと。

富樫覚委員。

○富樫覚委員 皆さんの意見が大体まとまってきてる感じがしますけれども、私、やっぱりAIを参考にした方がよろしいかと。プラットフォーム、1つに決められるのは今の段階はちょっと早いっていうふうなお話ですけど、私もやっぱりプラットフォームがいいんじゃないかなと思います。

私はもっとちょっと低いレベルで言いますと、今時、回覧板があんなにたくさんあるのはもう必要ないんじゃないかと思うつづき思っております。ただあれについても、よくよく見ますと酒田市で出してる情報とそれ以外に出してる情報がまだたくさんあるわけですよ。それも全てデジタル化していかないと今回、デジタル回覧板っていうふうなのが載ってましたけども、おそらく進まないんですよ。酒田市だけでも。全体的なことがありますので、そういうことも含めますと、デジタル関係の政策提言がいいのかなっていうふうには漠然と思ってるところです。

○伊藤欣哉委員長 すみません、一通りみんな意見を。

佐藤伸二委員。

○佐藤伸二委員 皆さんが出ましたので、私からも一言簡単ですけども、今まで皆さん出たことをみんな全部非常に大事なことというふうに思っておりますし、ぜひ本市にとっては取り上げて進めていかなければならない。そういうふうに思ってるんですけども、近年ずっと考えたとき、デジタル関係は確かに、食事を取るにもデジタルを一定程度マスターしないと食事が取れないような、そんな社会環境になってますんで。優先順位とすれば、高い方に設置するべきものというふうに思うんですけど、私の中では人口構成も含めまして、非常に大きく変わってる部分が子どもの数だと思ってるんです。それに伴いまして学校の姿がもうずいぶん変わってきて、これからもっともっと子どもを取り巻く環境も含めて変わっていかないとならない。

まして、子どもがいないとこれから酒田市の将来の姿も含めまして、非常に不安になる部分もあるのかなというふうに思うんです。そんなことを考えたとき、子どもに関わる教育環境、学校の姿、こういう部分を私は優先順位上げて協議していったらありがたいのかなというふうに思うところです。義務教育学校じゃなくて酒田四中学区が一緒になるんですけども。それ伴いまして、これから川北地区、旧市街地区も含めまして全部見直しが必要になってくるというふうに思っております。先の協議会で田中廣委員からも出ましたけども、松山地区で去年生まれた子が1人とか2人とかっていうような話も聞きますし、その前の年も片手に満たないような話も聞いております。こんなことで学校の形が全部変わってくるというふうに思っておりますので、そういうところをきちんとしながら、子育てに関わるような世代の若い人たちが安心して住める酒田にするためにも、そういうところを少し重点的に皆さんの議論を深めていったらありがたいのかなというふうに思っております。私の意見です。

○伊藤欣哉委員長 学校教育については少子化ということで、統廃合しないで小規模校のまま教育を充実させるか、やっぱりコストも含めて統廃合するか、どちらかになる。

○佐藤伸二委員 もっともっと言ったら不登校の子どもも学力さえきちんと認定できる。

○伊藤欣哉委員長 暫時休憩いたします。

午前 11 時 48 分 休憩

午前 11 時 49 分 再開

○伊藤欣哉委員長 再開します。

佐藤千佳夫委員。

○佐藤千佳夫委員 本当にこれからの学校の姿っていうのは、不登校って自分も40年小学校で不登校とか様々対策してきたけども、終わりの方になってから、なんで学校に行かないといけいいのか、なんてそっちの方が行かなくていいんじゃないかって、今不登校の方がいた場合は、その子は頑張って学校に行かない選択肢をしてるって、それを大事にしようって。その代わり、その子がこれから生きていくために何が必要かを一緒になって考えていこうっていう、そっちの

が大事。要は学校に行くことが子どもにとって得であるかどうか。得な学校であると不登校はゼロになります。

つまり今までの戦後の教育は、一斉指導しないといけないから、学校の先生がやりやすい指導、全員を前向かせないといけないとか、手を膝に置きなさいとか、そんなことは、子どもにとっては何もメリットなく、先生のための決まりだった。そういう意味じゃなくて今、子どもが生きていく上で得になることを教えていく、そんな実感できる学校にこれから変わっていくんだろうなって。だから小中一貫校もそれしないと結局失敗します。学校が主人公になっちゃうと、って思うので本当は子どもが主体の学校、主人公の学校になっていくべきだろうな。酒田全体がそうなれば、不登校は間違いなくなくなります。

○伊藤欣哉委員長 それを公教育の中で考えると、公教育以外のところを拡大していく、あるいは拡充していく。その辺の議論があるんですか。

佐藤千佳夫委員。

○佐藤千佳夫委員 はい。結局、コミュニティスクールというような外部評価を入れて、少しでも学校を変えていこうという考え方はあるんだけど、でもまだまだそういう子どもにとってが主人公の学校にやろうというのは少ないですね。そういう考え方をってる人がまだ少ない。そういう学校は不登校多いです。難しいです。どこでやったらいいか。

○伊藤欣哉委員長 田中廣委員。

○田中廣委員 今回の議論の中で、コミュニティスクールと違ってスクールコミュニティと違っていろいろ市の方でも言ってますけれども、実際何が変わったかっていうと、何も変わってないし、実際、スクールコミュニティの部分をやっているところありません。そのところを、言葉だけを先に、ということは、言葉が先に言ってることは子どもがここに残ったままなのよ。子どもと一緒に持っていかなきゃならないものを、市民と一緒に持っていかなきゃならないものを、言葉だけを先にやっちゃって。というのが今の酒田市教育委員会の考え方っていうか、やり方になってきてないのかなという感じは受けております。実際どうだこうだっていう部分は皆さんとの議論の中での話であって、これからだとは思いますがけれども。

○伊藤欣哉委員長 佐藤千佳夫委員。

○佐藤千佳夫委員 そのコミュニティの前に学校評議員会ってあって、たくさんの市議会議員さんも入ってると思うんですけども、今富士見小学校ではその評議員会の中に子どもを一応入れて一緒に話をし、説明を受けて、子どもの意見も取り入れるみたいな取組も昨年度行っています。コミュニティスクールは本来であれば変わらなきゃいけないんですよ。学校の方針とか、校長の経営方針に対して承認を得るっていう、それを大きいところがあるんだけど、やっぱりそこら辺って外部の人がどこまでいいのかなってなって、結局二の足踏んでしまって、変わらないのが現状であるんだろうなと思ってました。本当は人事もあつたんですよ。

○伊藤欣哉委員長 田中廣委員。

○田中廣委員 皆さん、小学校、中学校卒業式、入学式行きましたか。酒田市立中学校小学校なのに、議会には案内もないと。コロナ禍でなくなって、それ以来離れてきているのにさっき言ったコミュニティスクールって何って言う話。なんだかんだ言いながら、小学校は小学校、中学校は中学校で独自にやっていくのかなというところは見えてきてますよね、今。その辺もみんな育てる子どもと言いながら、育ててないというのが現状ではないかなというふうに思います。

○伊藤欣哉委員長 今論点としては、従来の学校教育では補完できない、把握できない子どもた

ちの教育をどうしていくかという点と、地域を巻き込んだ形の学校運営をするという論点としては、2点出ているというところで、いずれも充実を図っていくことは重要だとは思っておりますが、そういった視点ですかね。

杉山道弘委員。

○杉山道弘委員 今のスクールコミュニティとコミュニティスクールのお話がでてきましたが、自分も研修何回か受けたことなんですけど、地域の方でまず主体でやるってことで。スクールコミュニティですね。コミセンの方でやるってそれはそれで走ってて、コミュニティスクールは今度教育委員会の方で走ってる。そういう状態でスタートしたみたいなんです。どっちなのかって、また酒田市式スクールコミュニティを作るって初めてで、学校自体中学校が各主体で、それやりますというふうな方向に行ってるみたいなんですけど、もうそこでも全然、地域で研修に何も出してのに説明もフィードバックもなくて、どうなったのっていう状態が今の状態なんです。

今、田中委員もおっしゃってましたけど、卒業式も出てない、呼ばれない入学式も呼ばれない。運動会を一緒にしない。とそういうふうに地域がどんどんどんどん離れて、学校が離れていっているのに、でも、片やその机上の話では、スクールコミュニティってその矛盾がすごいと思うんで、実際私はこうやってるところで何か話は聞いたんですけど、要は先進でやってるようなところを研究するのもどうかなと思ってます。決してそのスクールコミュニティが駄目だとは言ってるわけなくて進めたいみたいなんです。ただ、現場は違います。先生方の働き方改革が優先で、もう地域と繋がりをどんどん離れたというところがどうなのかなと思ってます。以上です。

○伊藤欣哉委員長 ちょっと時間もあれなんで、まとめさせていただきたいと思います。今二つほどテーマとしてはあるのかな。市民が有効に使えるデジタルツールのスキルアップを進めていくための体制作り、話し合いの場の構築、あわせてそれに応じたプラットフォームについて含めた形で目指すというところと、酒田市の教育の中でのこれからの少子化に向かった体制をどう持っていくかということとをさらに明らかにし、目標、あるいは取組の目指すべきポイントを明らかにしてそれを周知を図っていきながら議論を深めるというところの二つ、そういったところで。

○田中廣委員 学区改編の関係も含めた考え方で。

○佐藤伸二委員 極端にいらなくなっているわけだから、やっぱりここは避けては考えていけないかな。

○伊藤欣哉委員長 ちょっといれる感じ。ちょっといろいろ議論があるでしょう。そこは、感情論もあるでしょうし。

○佐藤伸二委員 想像を超えた減り方だよ。

○田中廣委員 今生まれた子どもが6年後には小学校に入るんだよ。

○佐藤伸二委員 想像を超えてる。学校が成立しなくなるよ。

○伊藤欣哉委員長 では今申し上げたところ、まだ漠然とした内容になってますのでもう少し文章化をして4月臨時議会終了後、若干の時間を拝借して、17日に、言ったものを紙ベースで皆さんお示しをして、後でこの二つでまずいきましょうということの了承いただければそれでいいです。そういう話させてください。そこからヒアリングの団体だとか、あるいは当局の説明だとかを受けるというふうなスケジュールを具体化いうところで、よろしいですか。

(異議なし)

○伊藤欣哉委員長 はい、ありがとうございます。

## 2 その他

○伊藤欣哉委員長 その他について皆様から何かございますか。

(な し)

○伊藤欣哉委員長 ないようですので、以上をもちまして総務常任委員会を閉会いたします。

午後 0 時 00 分 閉 会